公民館報ちくま　平成26年10月1日

もっと知りたいふるさと ㊶

水とのたたかい 土口石積みの住居

土口公民館の北側、親水公園の堤防上に明治以後の洪水の水位を示す水位標が建てられている。明治43年と昭和50年代に3件の計4件が記録されている。今回は明治43年の洪水について考えてみたい。

ちなみにその高さを測定してみると、この時の水位は足元の草地から丁度2メートルであった。草地は堤防上にあるので県道須坂屋代線の路面よりはかなり高い。

記録によるとこの洪水は明治以後最大のものであった。「明治43年8月11日、大洪水。10日午後8時から水は土口小路へ入り、11日午前5時まで増水。土口床下浸水3戸を除き全部床上浸水。2階上浸水13戸、田畑居土多い処2尺。」

土口の水害の記録を示す水位標

この年の水害をはじめ、土口の集落では明治19年から同44年までの26年間に、大小18回の水害を受けている。水害の常襲地帯であった。

その昔、千曲川は旧篠ノ井の唐猫神社の南端で流路を南東に変え、「雨宮の渡し」付近で東に流れ、さらに宇佐美橋下流で土口の集落に沿って北に流れ、笹崎の突端を回って北東に流れていた。当時の千曲川の流れはかなり蛇行したものであった。

また、流路の勾配も緩くなり、水害の時には雨宮・土口の田畑は湖のように一面濁水で溢れていた。

さらに、この頃の堤防は霞堤（堤防が河川に沿って連続したものでなく所々切断され、二重三重に築かれた堤防）で水を防ぐためというより、流れを緩やかにするためのものであった。

以上の事から土口の水害は急流による流失ではなく、浸水による被害が多かった。しかし、長時間の濁流の湛水による被害は大きく、水が引いた後、田畑に堆積した居土の処理に困窮した。明治43年の洪水で、田畑の居土は2尺、つまり60センチメートルも堆積したという。

秋が深まってから、ようやく田圃の整地に着手した。これがまた、新たに開田するような大事業で、居土を取り除くために何十人もの労力をかけて、どの田も片隅に土の山を築いた。

この惨害に痛め付けられた土口区民は悲愴な決意をもって、生仁川（現沢山川）の右岸に堤防築造を県に陳情した。県は対岸の雨宮区に異議がなければこれを許可する方針であった。早速、雨宮区と交渉を始めた。雨宮区には土口区の苦境に同情するものが多かったが、利害相反するため容易に結論が出ず、回答は延び延びになった。そして長い年月の間にいつとはなしに立ち消えとなってしまった。

水害の非常対策として、生命・住居を守りたいという欲求から各戸は競って居宅・物置・土蔵等の地上げ工事を行った。古川耕地の居土や笹崎の山の土取場は早朝から夕方まで、住居の地上げ用の土を運ぶ荷車で賑わい、古川耕地の居土も何年もかけて、ようやく片付けることができた。

一方、石垣の間知石は生萱の北山の石切り場と土口の神社の東の石切り場から運び出され、地元の石工さんを中心に積み上げられた。熟練の石工さんでも1日1個の石積みがせいぜいだったという。

水害防止の悲願とたゆまぬ労苦の結果、現在の石垣の村ができあがった。

（資料　『雨宮県村誌』）

土口歴史民俗同好会会長
飯島　英雄

石垣の高さは3メートル
その石積みは大変美しい

公民館報ちくま　平成26年12月1日

もっと知りたい ふるさと ㊷

国指定史跡 有明山将軍塚古墳

平成6年7月1日発行の『更埴市史』第1巻では、森将軍塚古墳は昭和46年3月に国の指定史跡に、倉科・土口両将軍塚古墳は48年3月に県の指定遺跡に、また有明山将軍塚古墳は6世紀前半の築造といわれ、48年10月に更埴市指定遺跡に甘んじていた。

平成11年から12年にかけて、国50パーセント県15パーセント総額1670万円余で、有明山・倉科両将軍塚古墳を、東京学芸大学と静岡大学の学生、文化庁・県教委・指導者 岩崎卓也氏・木下正史東京学芸大学教授・滝沢誠静岡大学准教授、地権者の協力を得て、27日間延658人によって発掘調査され、平成14年3月28日調査報告書を発行。

粟佐橋東より見た有明山将軍塚古墳（前方後円墳 墳長37メートル）

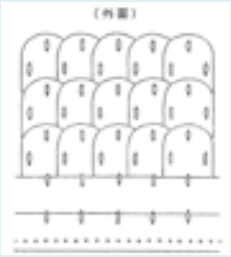
以下この報告書にもとづいて私見を交えて解説する。

有明山は過去に盗掘にあいながらも、鉄簇鉄斧刀剣と最も重要な甲冑の部品「小札」が10枚以上発見された。これによって一躍考古学者に注目された。平成13年までで小札の出土した古墳は、京都で3ヶ所、大阪で2ヶ所、福岡・兵庫・滋賀・三重・奈良・愛媛で合計11ヶ所。これらの古墳からの小札は特殊鋼で、今迄の鉄製品と格段な違いの武器防具である。

ここで朝鮮半島の歴史を見ると紀元前37年に建国した高句麗の王「朱蒙」が紀元前40年鋼鉄の開発に成功、強力な鉄器軍を編成。西暦500年頃には、遼東半島旧満州の一部と朝鮮の85パーセントを支配（391年19代王「広開土太王」より）。668年新羅・唐の連合軍に敗れ滅ぶ。

この製鉄技術が日本に伝わり大和王権成立にかかわった武人が前記11府県の古墳の被葬者で、有明山古墳の被葬者も同等と考えられ、木下正史氏・土屋哲樹氏は「小札の形態・大きさ・孔の数・穿孔位置・革綴の方法から小札革綴甲冑で全て前期古墳（300～400年）の副葬品としてのみ存在する。これにより有明山古墳の築造年代の有力な手がかりになると、また報告書でこれまで千曲川右岸の4基の古墳は森・有明山・倉科・土口の築造と改めなければならない」としている。そして有明山は4世紀代の築造と解される（木下正史氏）。ここでアルカ考古学セミナー「国境のない考古学会第4回」で県内24基の古墳の中で有明山のみ小札が出土した事で、意義深いものを感じ、学者の大半は山を利用しての造りは最古といわれ、これらの被葬者は大和王権につながる重要な地位にあり、鏡の管理者など政治的に結ばれていた。また、これらの権力者は死後かつて統治した土地を一望出来る高所に埋葬するよう後継者に託したといわれている。森将軍塚古墳の高さは490メートル、有明山将軍塚古墳は55メートル高く545メートル、倉科将軍塚古墳は540メートル、土口将軍塚古墳は450メートルとなっている。

現代人の感覚で大王を見下す高所に有明山将軍の墓は作られるだろうか。森将軍よりも眺望範囲が広い事も有明山の被葬者が上位ではないかと推察される。


小札を使った甲冑復元図
（京都府立山城郷土資料館瓦谷1号墳遺跡調査報告所23号より）

小札の形状については上辺が円弧状で下辺が直線で長さ巾共に3・5センチから5センチ、厚さ1ミリから1・5ミリの薄い鉄板で上下端に2ミリから5ミリの小円孔があり、革綴の痕跡があり、滋賀県の雪の山古墳出土の魚鱗形小札に似た形に復元出来たと記される。また、鉄の材料は朝鮮半島北部の磁鉄鋼が使われ剣の刃部に鋼を配し合せ鍛えた構造と推定される。

平成19年2月、有明山・倉科・土口将軍塚全て国の史跡に指定された。

東信史学会会員　牧　忠男

公民館報ちくま　平成27年2月1日

もっと知りたい ふるさと 43

肝煎市兵衛と新堤池

四十八曲峠の中腹に「新堤池」という溜池があります。堤は溜池を意味する方言で、新堤は「新しく造った溜池」ということになります。

新堤池を造ったのが、新山村の肝煎である市兵衛です。肝煎とは後に名主と呼ばれ、現在の村長のような役目をする人です。

新山村は平坦部が少なく、山地を開拓し水田化することに生活基盤がありました。新山村は千曲川から遠くにあるため、その水田用水は明確な記録はありませんが、永正11年（1514）に造られた足跡池という溜池から引いたものと考えられます。

桜を映す新堤池

宝永4年（1707）11月に富士山が噴火します。この年の9月には群発地震や千曲川の洪水が、また、前年の3年から4年にかけて日照りと旱魃が続くなど、噴火の前兆現象かとも思われる異常気象が見られました。

この時の旱魃で足跡池の水が涸れたのか定かでありませんが、市兵衛はどんな日照りでも水が涸れることがない新たな水源を求めます。山地に水田を有する新山村にとって、溜池の枯渇は死活問題です。

新堤池造成工事についての松代藩の記録は残っていないので確かなことはわかりません。ただ一つ市兵衛の残した「新山村堤御普請御人足目録」という記録があります。

実に松代藩内67の村から7840名もの人々が動員されており、千曲市内からも16村、2481名が新山村に集っています。信州新町や大岡、信田などの山間部から約2000人が、犀川北岸の善光寺平中央部である東和田や西尾張部などからも来ています。

記録によれば、工事は正徳元年（1711）の8月に行われ、「同17日迄」という付け書きや24日には目録を奉行所へ提出しているところから、工事は20日頃までには終了していたと考えられ、これは短期間で終わらせる人海戦術だと思われます。

藩から経費が出ていれば、藩によって動員命令が下っているでしょうが、正徳元年は大日照りでその炎天下に命令や賃金という理由だけで、30キロメートルも離れた村の溜池工事のために懸命に働くでしょうか。

各村々を巡って必死に訴える市兵衛のひたむきな姿が、同じ山間部の人々や水害に苦しむ善光寺平の人々の心を動かしたのでしょう。私たちも県内の災害を目の当たりにすれば、何とか力になりたいと切に願うものです。市兵衛の真摯な姿勢に、人々は松代藩領民としての連帯感に火を点けられ命令や義務、金銭以上の何かを、見たのではないでしょうか。そして、炎天下に汗を流すだけの価値を市兵衛に見出したのだと思います。

市兵衛を祀ったお宮

八頭山東麓の窪地に8000人もの力が結集し、完成した新窪地には1500メートル立方の水がたたえられたといいます。正徳3年（1713）には600人の人々により堤が補強されており、この池がいかに大切なものかがわかります。

新堤池には小さなお宮が建っています。これは共に働いた新山村の人々が、市兵衛に感謝して、伊勢の大神宮からお宮分けをしていただいたものだと伝わっています。

市兵衛と8000人が渾身の力を込めた新堤池は現在でも立派に役目を果たし、お宮には今もしめ縄が飾られており市兵衛の心は現在も新山に生きています。

新堤池は観光名所でもなく、看板や説明文もありません。しかし、新堤池は上山田のみならず千曲市にあっても、第一級の名所旧跡であります。

上山田　西澤嘉範

公民館報ちくま　平成27年4月1日

もっと知りたい ふるさと 44

葛尾城の「陰の松」葛尾山麓に暮らして

磯部地区の東南、坂城町との境に聳える葛尾山は、朝な夕なに親しみをもって仰ぎ見る山であります。山頂にはかって村上氏の居城であった葛尾城がありました。葛尾城跡は、昭和49年に長野県の史跡に指定されました。

磯部地籍の登山道からの見学者も増えており、地元の「磯互会」「陰の松保存会」の登山道整備や草刈作業は一段と重きを置く活動となっています。

かつて葛尾城への兵糧米の運搬路であったとされる登山道沿いには、米入口―矢の手―乙女の泣坂―石打古場―「陰の松」―盗人窪など葛尾城に関係ある場所が点在しています。

その中の「陰の松」は、葛尾城が築城される際、本郭から見て裏手となる矢首平に見張場を造り、名木の松が植えられて、要塞の一部となったとされています。

平成13年当時の「陰の松」

また、対する南西方向に当たる支城姫城に程近い苅屋原地籍の灯の松も城の要塞の一部とされて名木の松でありましたが、昭和34年の台風15号の被害で倒木となってしまい惜しまれます。

陰の松の地籍は、山腹の平坦部にあって、1596平方メートル（483坪）程の広さがあり、現在そこには赤松の若木が育ち、「史跡陰の松」の記念碑が建立されています。また、案内板・休憩小屋・丸太ベンチが置かれ登山者の憩いの広場になっています。

明治末頃から大正初め頃の周辺は桑畑が広がり、5、6本の松陰が桑摘みの人達の休憩や昼食に利用されました。また磯部の里からは景色のよい松が眺望されていました。

里で拝む　初日の照りや影の松（清水）

日の光り　風の光りや　影の松（熊月）

時の句が示すように、生き生きとした輝くばかりの陰の松が目に浮かびます。

陰の松のあたりを地元で「野山」と呼んだ時代は、養蚕だ、食糧増産だ、の頃で、子供たちまで山仕事を手伝い、「野山」は、農耕地となり、磯部地域の人々に食の恩恵を与えました。

葛尾「陰の松」案内図

戦後ともなると若い世代の人達が工場・会社勤務に変わり、山の農地も山林となって、陰の松周辺は成長の早い落葉松が植わり、伸び盛りの樹木に囲まれるようになると、陰の松にかげりが見え始め、2本の松が次々と枯死、残る1本松は何としても残さねばと、区民総出で保護対策と記念事業が実施されました。

平成13年、磯部保存会の会員として陰の松の草刈作業に参加、見事に甦った遺跡の松が緑の葉を元気に広げている姿を眺め感激しました。

陰の松の保護活動には、樹木の専門知識と技能及び多くの労働と機械操作が必要でした。造園技能士で磯部代理区長職だった松沢さんに当時のお話を聞きました。

松に胡桃の大木がのしかかり、日が全く入らない有り様に驚いたそうです。松は日当たりが命です。次の日から毎日山に登り、一念発起「昔の陰の松にしたい」と、消毒を試みて五日後の現場には害虫が1匹もいなくなっていたそうです。

また、松の股に枯松葉がたまって、松の炭酸同化作用が出来ない状態であったことも聞きました。

高い股の所の作業にはロープを張り6メートルの梯子に更に梯子を繋げた高所で曲芸作業を夢中でやった。今思えばぞっとするが当時だから出来た、と笑顔で話されました。

平成17年12月です。大切な遺跡の松は「こぶ病」で枯死。皆が見守る中、切り倒されました。原因を探るため渇水となっている山の水源の影響調査も進められました。

現在、陰の松には代替わりの若松が9本育ち10年目を迎えています。保存会は陰の松復活を目ざして終わりのない活動をしています。無理をしないで、肩肘張らず、楽しく続けようと…。

磯部　小出幸子

公民館報ちくま　平成27年6月1日

もっと知りたいふるさと 45

「川中島の戦い」は八幡がスタート

天文23年4月22日は、西暦1553年6月3日(新暦)にあたる。この日以後12年、五次(12回)にわたり、武田信玄(晴信)と上杉謙信(長尾景虎)が繰り広げた「川中島の戦い」は第1回目の戦いが当地、千曲市八幡で行われた。

その4カ月後の9月1日(新暦10月8日)にも八幡で第3回目の戦いが行われている。後世の歴史家は同年8月の第2回目の戦い「布施の戦い」と併せて「第一次川中島の戦い」と整理している。

なぜ「川中島の戦い」が始まったのかを当時の記録文書『高白斎記』(武田家家臣の日記で信憑性が高い)を読解した歴史書や『更科埴科地方誌』(昭和53年)等から整理してみた。

武田信玄は1541年、父を追い出し甲斐の国主となるとともに、強力な軍事力をもって現長野県の諏訪・伊那谷・中信地方・安曇地方・佐久地方を次々と侵攻し、支配下に入れていった。

残るは上小地方と北信となるが、そこに立ち塞がったのが葛尾城や塩田城を拠点に更埴地方も所領としていた「猛将」村上義清であった。

村上義清は、武田信玄の侵攻に対し、1548年上田原の戦い、1550年戸石城の戦いともに勝利し、信玄の北信侵攻の壁となっていた。しかし、1551年、武田側の真田幸隆の急襲を受け戸石城を失い、以後急速に周辺の支族(屋代や塩崎、石川氏等)が武田の武力に屈服し武田側に寝返ったため、ついに1553年4月9日、葛尾城を放棄し、中野の高梨政頼を介して越後の長尾景虎のもとへ逃亡した。

村上の支援要請を受けた長尾景虎は早速、5000人の長尾・村上・高梨軍を編成し、村上の領地奪還に向け4月20日には塩崎・稲荷山までやって来た。

棚田より「八幡古戦場」を望む

一方、坂北の青柳城に前線基地をおいていた武田軍はこれを察知し、8人の武将の軍を八幡に送り込み迎撃に備えた。

4月22日、両軍は八幡で衝突したが長尾軍が優勢で、翌23日には葛尾城を奪還し、その後、塩田城まで奪還するとともに武田軍を深志城まで後退させた。これが第1回目の戦いである。

しかし、3カ月後の8月、武田信玄の執拗な侵攻に自落した村上は再度、長尾に援軍を求め、9月1日に再び八幡で戦い、今回も優勢で旧領を奪還した。

その後も武田軍の北信侵攻は続き、2年後の1555年には、「第二次川中島の戦い」へと移って行く。

これで分かるように、「川中島の戦い」は、武田信玄の信州侵攻に多くの武将達が屈服するなか、最後まで抵抗するとともに、隣国の強力な長尾景虎に助けを求める策に出た村上義清と、これを受けて立った長尾景虎の武田からの越後自身の防衛を兼ねた戦いがスタートであった。

そして、八幡が戦場となったのは、村上の旧領入り口で、善光寺平一望のこの地が、武田軍にとって相手の動きを見て迎撃するに絶好の場所であったからではないだろうか。ただし、結果は多勢とみられる長尾・村上軍が優勢であった。

460余年後の今、八幡の住民有志はこの史実を後世に伝え、「歴史・文化ゾーン川西」の新たな史跡とするため、記念碑建立の活動を開始した。

八幡　南澤　和夫

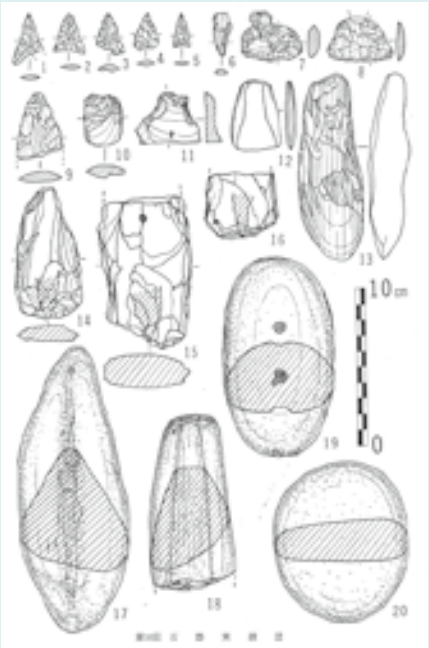
公民館報ちくま　平成27年8月1日

もっと知りたい ふるさと ㊻

私の新しい故郷「大田原」

大田原は、標高760㍍、現在、千曲市で最も高いところにある集落です。そして森地区の標高900㍍の沢山川水源に見られる沢山遺跡と共に1万年以前の洪積世（現在の呼び名は更新世）に、旧石器時代の人々が生活していた千曲市で最も古い悠久の時代の痕跡が残されている地域でもあります。

大田原は洪積世の活発な火山活動により谷がせき止められ、現在田圃になっている地帯は湖沼をなしていました。その湖底には周囲から流れ込んだ粘土質が厚く堆積して、その粘土層の中には埋もれ木が立っているといいます。



池尻遺跡　発掘石器

この湖沼を囲むように旧石器時代から縄文時代をへて、弥生時代、奈良、平安期までの上日向古窯群・向山古窯・いちごば遺跡・大門遺跡・下日向遺跡・峠遺跡・佐野山遺跡・大久保遺跡・池尻遺跡が点々と発見されています。その1つである池尻遺跡の発掘調査ではリンゴ箱2つほどの石器・土器が集まり、それには縄文早期・前期から中期・晩期までの各時期の形、文様の特徴を持つものがあり、縄文各期を通じて人々の生活を育む豊かな自然があったことを示しています。

文献による大田原の歴史は鎌倉初期から始まります。「松林家文書」「田原神社文書」等によれば、寛喜3年（1231）京都東伏見から関白藤原基通の次男松林大城守親信（藤原親信）主従9人が摂関家との土地争いに敗れ落居。生活に困り、うち7人がやむなく罪をおかし切腹、残った親信、右近父子が大田原を開墾したと記されています。この7人を祀った「七人塚」があり、現在でも祭りが行われています。松林親信が開郷した村だということです。現在でも松林姓が75㌫、祢津・宮本・丸山姓が10㌫～数㌫ずつです。藤原氏が「松林」の姓を名乗ったのは、京都東伏見の屋敷に松が多く生えていたからとも、将軍家から松林監守の役をおおせつかったからとも書かれています。

この大田原開郷譚を検証してみました。藤原氏の系図によると、藤原基通（近衛家）の次男の名は道経であり、親信ではありません。長男＝家実・三男＝兼基（鷹司家）・四男＝基教で「親信」は出てきません。庶子の可能性は考えられます。藤原氏と源氏に詳しい系図「尊卑分脈」には、「藤原親信」は5人出てきます

「日向」地区に祀られている七人塚

が、いずれも時代が合いません。「大城守親信」の素性はいまだ確認できていません。「松林」姓については、東名高速道京都南ICの南、伏見区に「松林町」があり、この点では符合します。当時は近くに鳥羽離宮があり、公家の屋敷が並んでいたとは現地図書館職員の言です。寛喜2、3年は天候不順、鎌倉期を通じて最大の飢饉で「天下の人種三分の一失す」と記録にあり、信州への落居の理由はこの辺りにありそうです。

東京の墨田区・吉祥寺・国分寺・立川・昭島とあわただしく住居を替え、「故郷」と言える場を持たない私が、風に舞うタンポポの綿毛のようにして舞い降りた大田原に住んで16年、自然と親しみ、地域の来し方を知り、人々と織りなす人生を過ごして、故郷を得た思いです。

桑原大田原　幸野　耿

公民館報ちくま　平成27年10月1日

もっと知りたいふるさと 47

杏の里森 岡地天満宮の縁起記

杏の里千曲市森岡地地籍の高台には、神社庁登録の「岡地天満宮」が鎮座されています。本尊は学問の神様、菅原道真公（845～903）が祀られています。

岡地天満宮には菅原公像（木質）一躯が安置されているほかに、紺紙金泥の法華経妙荘蔵王品一基が供えられ、菅丞相書『法華経ならびに親作木像記』によると、これらは菅原公の自作・真筆だと伝えられています。

古文書によると、これらの貴重な文化財が岡地天満宮に安置されるに至った経緯は、江戸城築城で名声を馳せた太田道灌入道が足利学校（中世の高等教育機関で室町時代初期に栄え、その後は色々の屈曲を経ながら明治5年まで存立した学校です）で学問を修めた時、請い受けたとされ、事由は江戸の「湯島天神」に安置しようとされていましたが、当時の江戸は水害・火災等不慮の災害が多く、これが叶わない状況にありました。

そうした中で、当本尊および付属書簡は徳川家康、同家光将軍の手を経て、官医・土岐長庵から信州松代藩の菩提寺長国寺に遺贈されることとなり、その経過を記した書面は太田道灌が起筆した桐箱に納められています。

さらに、寛政2年（1790）長国寺第十七世住職千丈實厳師が、当時の岡地村の観音庵の敷地に「華厳寺」を創建開闢し、遷住した際、岡地天満宮に安置され、以降、学問・書道・慈悲の神として岡地地した。

別当、華厳寺はその後廃寺になりましたが、天満宮は昭和57年8月大改築を行い、森地区内外の皆様から篤志寄進を仰ぐ中で再建されました。

特に近年は、貴重な文化財「岡地天満宮」を守るために岡地地区に住む若人が「OKG」を設立し、「合格鉛筆貸出し構想」を企画実行した結果、年末年始に行われる越年祭・元旦祭・初天神祭では高校・大学・就職合格祈願の参拝者が、地元はもとより県内外まで増大し、活気に満ちています。

なお天満宮の拝殿内には天部・虚空蔵菩薩が安置されているほか、天満宮周辺には耳聾薬師堂や清水製鉄遺跡があり、隣接の岡地公民館は住民の憩の場になっています。

興味のある方は機会をみて、「日本一を誇る杏の里と、由緒ある岡地天満宮」を探索してみてはいかがでしょうか。

（文責）岡地天満宮総代長　北島武重

拝殿の外側

拝殿内の様子

時期になれば多くの合格祈願者が訪れる

【参考文献】
『森ふるさと史跡探訪記』
『乙路の県岡地探訪記』

公民館報ちくま　平成27年12月1日

もっと知りたい ふるさと 48

船山神社（旧三島大明神）

鋳物師屋区に鎮座し、崇敬厚い「船山神社」（明治11年三島大明神を船山神社に改称）は、古老の口碑等によると天文10年（1541）船山守護所跡と思われる地点に「三島大明神」として建立されたという。

また、明治36年に報告された資料では「草創明カナラズト雖モ御本殿ハ元禄年中御葺換ノ事アリ、境内社木槻ノ大木周囲ガ丈余ノモノ立チ居リシモ寛文年中風雨ノ為メ朽損シテ数本打折レタリシモ記録当村旧家ニ保存セリ殊ニ往古除地高一石六斗二合五勺ヲ祭祀料ニ給典セラレシ等古社ナルヲ證スルニ足レリト雖モ社家中世変遷セシ為メ其記録ノ如キ散蝕正ヲ尽スヲ得ズ、殊ニ寛保度水災（寛保2年の戌の満水）ノ為メ益々其詳蹟ヲ失フニ至レリ今ハ尽口碑ニ徴ヲ求ムルノミ」とあり、この報告書によっても寛文年代の1660年以前に現在の地に船山神社が鎮座していたことは確かである。

焼失前の拝殿

埴生地区他近郷の村々は江戸時代初期の慶長7年（1602）に実施された北信四郡の総検地により初めて村落として認められたもので、以前は船山郷の一集落として存在していた。

粟佐神社は船山郷を含む近郷の総社として「延喜式」神名帳に記載されている古くからの名社で、「建御名方命、事代主命、少彦名神」を祭神としている。このため関係する村々は「建御名方命」を祭神とする旧名諏訪社が多い。

なぜか周辺の地域と異なり当船山神社は伊豆の三島大社の祭神である「大山祇命」を祭神としている。

船山郷に守護所が設置されていた時代は鎌倉幕府の支配下に有り、当時の幕府は伊豆の三島大社を厚く信仰していたことから守護所の守り神として三島社を招致して居たという古老の口碑も有り、この守護神が旧名三島大明神として今に伝わって来たのではないかと推察される。

当船山神社の祭典の祭事について昭和初期までは「若者連」という団体があり、祭りに対して幟立、社内の飾り付け等を行い、大正時代まで参拝者を楽しませた。大仕掛けの飾り物も行われ、当時としては飾り物で有名な穂高神社をしのぐものがあったと言われている。残念ながら神社の火災で飾り物の人形の頭等が焼失してしまい、当時の痕跡は言い伝えのみとなってしまった。

以前の社殿は昭和31年に鋳物師屋の大火災により焼失してしまい、現在の社殿は昭和34年に建立された社である。火災前は欅・槐・榎等周囲4メートル近い大木があり、槐は子供が2～3人入れるような空洞のある大木であった。

欅・槐は火災後伐採されてしまい現在は明治初期に植樹されたといわれる銀杏のみで、大木に囲まれた風格ある神社の面影は残念ながら止めていない。

神社の境内には秋葉社（火之迦具土神）・保食神・天神宮（安政5年の記録にあり）・養蚕社（明治21年建立、昭和11年改築）の末社がそれぞれ祀られている。

左から　天神宮　養蚕社　秋葉社　保食神

参考資料　区誌『ふなやま』、船山神社保存資料

鋳物師屋　宮坂尚敏

公民館報ちくま　平成28年12月1日

もっと知りたい ふるさと 49

上山田温泉の発展に尽くした人々

「戸倉温泉」と「上山田温泉」は共に千曲川左岸に位置していることから、便宜的に「戸倉上山田温泉」と呼称されています。

戸倉温泉を開発した坂井量之助は有名な人物です。では上山田温泉の開発に携わった人は、どんな人々だったのでしょうか。

上山田の温泉を発見したのは若林才兵衛という人物です。才兵衛は半農半漁を生業としており、明治元年2月に千曲川で魚釣りをしている時に足裏に微温を感じて掘ったところ、温泉が湧いたと伝わります。才兵衛の住む場所には、かつて湯の窪と呼ばれる鉱泉があったと才兵衛は古老から聞いていたようです。鉱泉の事を知っていたからこそ、才兵衛は掘ってみたのでしょう。年寄りの話は聞いておくものだと、この例からもわかります。

戸倉上山田温泉の象徴でもある城山

戸倉温泉は、明治26年に開湯されます。上山田側も明治10年から宮原治五兵衛・吉池百作・西沢保高・若林三治郎ら有志が金を出し合い掘削を試みますが、洪水のため失敗続きでした。そんな中で上山田の人々を奮い立たせたのは、高野直次郎という人物の歩みでした。

直次郎は明治元年に戸倉の大西河原で温泉を発見した人物です。直次郎は温泉掘削を志して、洪水に遭っても、たった一人でその努力を続けます。2度に亘って県に掘削許可を求めますが、いずれも否決されて、直次郎の夢は果たせませんでした。

しかし『上山田町史』には「直次郎の努力が上山田の温泉開発意向に感奮を促した大きな原動力となった事は確か」と記されています。洪水に負けず努力を続ける直次郎の姿は、上山田の人々には尊く映っていたのでしょう。

失敗続きの掘削作業は宮原正太郎に受け継がれます。正太郎は吉池百作と新潟県の石油掘削や鉄工所へ視察に赴き、大きなキリが螺旋回転して穴を掘るという「軽便削井機」を考案しますが、技術不足のため、キリを地中に落とし、掘削は失敗します。

しかし、上山田の人々は諦めることをしませんでした。掘削作業を手伝い、金を出し合い、地元の波閇科（はべしな）神社のみならず武水別神社や別所の北向観音まで赴いて、作業の成功を祈願したと伝わります。

「一念岩をも通す」の言葉通り、明治36年に削井機は大いに唸り、熱泉を掘り当て4月22日開湯式が行われました。

ある女性が父親の言葉として「上山田の人間は土である」と言いました。砂は強く握っても手からこぼれますが、土は握ると固くなります。

水と緑と潤いのある公園にある碑

碑側面には「歴史を切り開いた人々の栄誉を讃える」とある

温泉掘削、温泉場開発に携わった人々の名前

上山田の人間が事にあたるに際し、一致団結する気質を表現した言葉です。この温泉開湯に関わる話が、それをよく物語ります。

若林才兵衛・高野直次郎・宮原正太郎はもちろんのこと、生粋の上山田人が決してあきらめることなく明日を見据え、土となって出来上がったのが「上山田温泉」といえます。

上山田　西澤嘉範

【参考文献】
『上山田町史』
『上山田の風土』
『上山田温泉株式会社創立百周年記念誌』

公民館報ちくま　平成28年4月1日

もっと知りたい ふるさと 50

「冠着山一名姨捨山」の歴史

正親町三条家は、遠い昔、宇都宮二荒山神社の「豊城入彦命」を祀る氏族の直系子孫と言われ、その分流の末裔が佐良志奈神社神主松田（豊城）家であると言われている。このことから、松田家は三条家と親交を深め、文政元年（1818）松田直友は、三条家に、神職のお手伝いに上がり、帰りの際、正親町三条実愛卿に社頭碑の題字を頂くとともに、柳原家へ嫁いだ卿の伯母則子から「月のみか露しもしぐれ雪までにさらしさらせるさらしなの里」の歌を賜った。

直友は、この題字と歌を親交のあった佐久間象山の助力を得て、佐良志奈神社社頭碑を建てた（左写真）。

さて、柳原家は藤原定家を祖とした歌道の家系であることから、則子が直友におくった「さらしなの里」の歌は、柳原家に伝わる古歌の影響が多分にあったと考えられる。また、則子の孫娘愛子は明治天皇の側室となって、大正天皇の生母となる。

和歌の環境に育った愛子は、宮中の歌会を司る宮内省供奉官、加部巌夫・近藤芳樹と勅撰和歌集や諸家集などを談じて、姨捨山の和歌にもふれられていたと推測できる。

また、近藤・加部は「古歌に載る姨捨山は冠着山」であると、最初にとなえた先駆者と考えてもよい。両名は明治天皇に供奉し、明治11年9月8日、明治天皇は北陸御巡幸の際戸倉駅（宿）でご休憩された。この時、加部巌夫は戸倉駅より、名所と言われる姨捨山あたりを巡見し、急いで善光寺大勧進に追いつき、同僚の近藤芳樹に対し、「姨捨というも名所にはあれども、伝えたる古事に取るにも足らず」と伝えた。

ニュースは直ちに、東京日日新聞随行記者、岸田吟香によって、9月13日に「御巡幸の記」を全国版にて報道された。この報道に明治12年12月、長野県小学教科書『信濃国地誌略下』に影響し「冠着山ハ一名姨捨山ナリ」が載る。さらに、政府の命により編集していた『羽尾村誌』の素案に、勅撰和歌集や諸家集の中から21首選び記載して県に提出している。

明治13年6月、宮内省より、明治天皇御巡幸の記録『陸路廼記』が近藤芳樹によって発行され「今の姨捨山は似非法師のつくりごと……」と掲載される。

明治21年、三か村（須坂・若宮・羽尾）の合併に当たり、倭名抄更級郷に載る古歌「佐良志奈」や柳原夫人から賜った社頭碑「さらしなの里」の歌が根拠になって「更級村」と命名し、県庁に申請して認可された。翌年22年、正式に合併の運びとなった。これは神主松田直友と塚田雅丈の発案と言われている。

明治11年明治天皇御巡幸図

明治21年『信濃国地誌略全』が発行された。その中には、冠着山姨捨山の所在が消えていた。地元や俳諧団体のまきかえしがあったと思われる。

羽尾の塚田雅丈は、この誤りを指摘して、明治22年3月9日、『長野新聞』第3038号～3039号の紙上に「真の冠着山」と題して土曜日と日曜日の2日にわたって発表した。その後、冠着山の環境整備を行い、明治26年9月6日、『信濃毎日新聞』1面に「姨捨山の所在の誤りを矯正す」と題して全面広告を出した。真の姨捨山は冠着山であることを、明治天皇御巡幸の際、宮内省の加部巌夫が姨捨を巡見した所から始まり、15年かけた復権運動の成果を県下に報告した。

この時期をもって、冠着山（姨捨山）の所在地は認定され、明治43年測図、大正2年製版の地図に堂々冠着山（姨捨山）1252・2メートルと表示された。

参考文献
戸倉史談会誌「とぐら」41号

羽尾　大橋静雄

公民館報ちくま　平成28年6月1日

もっと知りたい ふるさと 51

猿ケ馬場峠の由来

江戸時代篠ノ井追分北国街道脇に大きな茶屋「柳屋」があった。現在その筋向かいに「北国街道篠ノ井追分宿跡　西澤権一郎書　昭和五十一年九月吉日」と刻まれた石碑がある。

その北国街道から分かれ、北国脇往還「善光寺道」は稲荷山宿・桑原宿・中原間宿を通り、猿ヶ馬場峠へと登る。街道の中でこの峠は、一番長く一番険しい峠であった。

猿ヶ馬場峠ができる前は、麻績から冠着山の古峠を越えて羽尾へ出、越後の国に通じていた。冠着山の峠も、古峠から鎌倉時代には一本松峠にかわり、室町時代からは猿ヶ馬場峠越えになったと言われている。

「関ヶ原の戦い」によって天下を掌握した徳川家康は軍事的・経済的立場から交通路整備にとりかかり、慶長6年には東海道、翌年には中山道を整備し五街道を制定した。

五街道以外の脇街道は幕府の直轄とせず、そこの領主によって整備されたと言われている。天正10年、武田信玄の家臣馬場美濃の守によって猿ヶ馬場峠は開発整備された。峠付近には沢山の猿が群れをなしていたことから、猿ヶ馬場峠と言われたようだ。

中原は西の外れにあり、峠はここから急な登り坂となる。100メートル程上がった所に「右山みち　左いせみち」と杉の根元に小さな石の道しるべがある。さらに50メートル位上がると平山墓地がある。この墓地は普通の墓地とは少し異なっている。一般墓石のほかに、聖観音や如意輪観音、双体の道祖神などが集められている。これらの神々は道路改修の際、付近にあったものを一か所に集めたものと思われる。この墓地には無縁墓石も数体あってそのうち1基には、「文政十一子年十一月十三日　渓道関禅定門　石見国邑知郡熊見村弥七墓」と刻まれている。善光寺に向かう時に倒れたのか、あるいは参詣の願いを叶えたのち帰途に亡くなったのか、現在の島根県から遠路旅してきた弥七の胸中が思いやられる墓碑である。猿ヶ馬場峠も開発が進むと、行き交う大勢の旅人で賑わう反面、盗賊も出没し、治安も悪化した。

弥七の墓

さて、一気に頂上まで登ると聖湖に出る。この聖湖はかつては色々の呼び名があったが、昭和39年に聖湖と改められた。この池より5、6丁下ると馬塚がある。「是筑摩郡更科郡の境なり」とある。馬塚からさらに下ると猿飛の岩及池または猿飛の池とも呼ばれる小さな池があり、この付近は野猿が群れをなして遊んでいたので「猿飛の池」の名がついたと言われている。

「善光寺道名所図会巻之二」には「十八丁下りて燧石に茶屋あり、名月屋寅蔵といふ座敷の床に大岩を作り込んで壁の代に用ひたり、小石を以って是を叩くに火の出ること速かなり。往昔八幡宮の神燈及神供を調に、此の所の石を以って火改むる事なりし故に今に至る迄燧石の名残れりとぞ」と記されている。

「名月屋寅蔵茶屋」跡

旅人を救うため松代藩より3人「宮下・松崎・大井」が命を受け、それぞれ一千坪の山野を与えられ、茶屋を営みながら、旅人を山賊から守ったり、また、旅人の面倒をみたと言われている。以来この地は「三千坪」と呼ばれるようになった。「名月屋寅蔵茶屋」は中でも格式を誇り、六文銭の紋所を与えられ、「御憩休本陣」として、茶屋入り口の黒門には六文銭の紋所、また、屋根にも六文銭の紋所をかかげていた。

当時、茶屋では旅人に「姨捨十三景」の絵図を売っていたものか、我が家には当時の版木が保存状態もよく今に残されている。

参考文献

「善光寺道名所図会巻之二」
「歴史の道調査報告書Ⅵ～Ⅹ」

八幡　宮下静雄

公民館報ちくま　平成28年8月1日

もっと知りたいふるさと 52

稲荷山の祇園祭と牛頭天王祇園神輿

○稲荷山の祇園祭の始まり

祇園の神様として現在、治田神社境内に祀られている津島社は、享保18年（1733）に京都祇園社より勧請、治田町旧道南端に鎮座し、厄神宮牛頭天王社と呼ばれた。疫病退散の守護神であり、商売繁盛・家内安全の神ともなった。

明治初期の神仏分離令後は、八坂社とも津島（天王）社ともいわれ、界隈は「天王町」と呼ばれた。また、八坂町の地名を記す明治の古地図も残る。

○稲荷山の祇園神輿

天明5年（1785）、京都から「牛頭天王祇園神輿」を迎え、宝蔵に安置。暴れ神輿のため損傷がひどくなった文政8年（1825）に神輿を再調整するが、弘化4年（1847）、善光寺大地震の際焼失した。なお、現在残る土蔵造りの重厚な商家は、この大地震後、耐火構造を意識して造られた。

今年の祇園祭の様子

○三代目神輿と四神の登場

三代目神輿の完成は、慶応元年（1865）のこと。神輿は飯山村佛檀屋惣左ヱ門が145両で、神輿渡御の先導役となる四神は、水内郡妻科村の彫刻師儀作が40両で請け負う。また、治田神社境内に神輿殿を50両で造営、神輿渡御のために治田神社参道も拡幅したという。諸経費合計260両2分100文、支払いは各町が分担した。なお天王社は、明治41年6月、政府の神仏合祀政策にしたがい、治田神社境内に移されている。大正6年（1917）、治田神社拝殿完成を祝し、東町有志が大獅子を作り、舞を奉納。いまその大獅子が勇獅子となり祇園祭を盛り上げている。

○四神について

古代中国に源流をもつ東西南北の各方位を象徴する霊獣で、五行思想にしたがって東西南北を象徴し、四方それぞれの方角を守護し、悪霊を退け、陰陽の気を順調にめぐらすとされる。東の青龍（緑・春）、西の白虎（白・秋）、南の朱雀（赤・夏）、北の玄武（黒・冬）がおり、中央に黄龍（黄・土用、稲荷山は剣龍で祇園祭以外の日は稲荷山宿蔵し館で展示）を加える。

○近隣に残る牛頭天王の足跡

天王下ろし・天王上げなど祇園行事に登場する牛頭天王とは一体何者だろうか。

祟り神が転じて護り神になるように、牛頭天王もまた、恐ろしい疫神・邪神から悪疫を誅する駆疫神・辟邪神となり、素戔嗚男尊・薬師如来などと習合し、祀られている。

上田市信濃国分寺の八日堂縁日で頒布される「蘇民将来符」は、牛頭天王が蘇民将来に与えた厄除け開運の護符である。

平成19年（2007）、八幡の東條遺跡から出土した「蘇民将来符」木簡は13～14世紀のもの。表に「蘇民将来子孫人□□」、裏面に陰陽道の魔よけ呪符「☆（五芒星）」が描かれている。信濃国分寺所蔵の古文書「牛頭天王之祭文」（1480）より古い千曲市出土、県内最古の「蘇民将来符」木簡が「牛頭天王信仰」の足跡をいまに伝える。

また、長野市善光寺淵之坊に伝わる室町時代の「縁起掛幅」第1巻は、右側に阿弥陀如来、左側に牛頭天王および蘇民将来伝説が描かれている。善光寺信仰の功徳として、厄疫退散が大きなウェートを占めていたことをうかがわせる。

稲荷山　宮坂勝彦

「縁起掛幅」の牛頭天王

「蘇民将来符」の木簡
（長野県埋蔵文化財センター所蔵）

★お知らせ★

公民館報「ちくま」1～50号までの「もっと知りたいふるさと」が千曲市ホームページに掲載されました。郷土の歴史を知る一助としてご活用ください。

公民館報ちくま　平成28年12月1日

もっと知りたい ふるさと 53

立川流の彫刻がある土口の古大穴神社

土口の集落の北の端、北山の山腹から山麓にかけて古大穴神社が鎮座している。

当神社は諏訪大社の分社であるが創建年月は不詳である。江戸時代の中期、享保12年4月（1727）に社殿創建とあるのが最も古い記録である。

諏訪信仰の歴史は古く、民間信仰として全国的な広がりを見せ、分社は全国に及びその数の多いことで知られている。私たち土口の祖先も、産土神（生まれた土地の守護神）として諏訪分社を祀り、その崇敬祭祀は、子孫に受け継がれて村共同体の統合の基盤ともなってきたのである。

拝殿の外側　鈴のある後ろを向拝という

本神社の祭神は、建御名方命と八坂刀売命で、以前は諏訪大明神と呼ばれていた。民間信仰には移り変わりがあり、古来、狩猟神・農業神・武神として信仰されてきたが、現代は平和な生活維持を願う神となっている。

社名は明治13年（1880）に「社号は所在する地名を付けること」との国の指示で、現在の古大穴神社と改名したものである。『雨宮県村誌』によるとこの大穴の名は、平安時代の天暦、康保の年代（950年ころ）に「この地域は太古、穴居営窟（俗に塚穴）が多く郡中他に比類なきほどであり、村居の北方の北山の半腹より麓にかけて坑居相連なりその数百有余、遠く望めば室居の如く見ゆ」とある。「里老伝えて人民の祖先の居なり」と言う。また「大穴郷（大穴、多穴、あるいは於保奈）の由にて起りし処、土口の名、またこれに基づくなり。殊に今の社の石階のある処にあった窟の如きは区内第一の広大なものの由、この社は古くはこの地の長（郡領）を祀りしか。永遠の天才にて確証なし」とも言う。

拝殿の中の様子　本殿は見ることが出来ない

現在の神社の拝殿は慶応3年9月（1867）に建て替えが始められ、3年後の明治3年9月に出来上がったものである。

拝殿の彫刻は立川和四郎の弟子であった池田文四郎（後に立川文四郎を名乗る）の作である。正面向拝上の虹梁は牡丹に夫婦の唐獅子が子獅子を見守る彫りが両端にあり、左側には玉の透かし彫りがある。その虹梁上には夫婦の竜がやはり子供の竜を見守る立派な彫刻である。向拝の内側の虹梁には浪にたわむれる千鳥が10羽遊んでいる。この彫刻が裏表にある。

右側の上端には海老虹梁があり、老松に鶴2羽が遊んでいる。また蟇股と思われる場所の右側には伝説の酒呑童子2人が大瓶の両側で大盃を持ち柄杓を肩に担ぐ者、手に持って汲まんとする者になっている。左側も同様に柄杓を持つ者、左手に扇をかざしている者がいて、手挟には大海原の浪に浮上して海草のついた老亀2匹が彫られている。

拝殿の最後部の小さな建物が本殿が入っている覆屋である。その本殿にも拝殿と同様すばらしい彫刻がある。彫り師は不明であるが、拝殿の竜など似た彫刻であることから、立川流の彫り師のものと考えられる。

小さな区の神社に、このような立派な彫刻があることは驚きであり、我が土口の誇りでもある。近在では当神社の他に粟狭神社、八幡の武水別神社、森の興正寺の山門に立川流の彫刻がある。

参考文献
『雨宮県村誌』

土口　飯島　英雄

公民館報ちくま　平成29年2月1日

もっと知りたい ふるさと 54

寂蒔上町の史跡と青麻大神

北国街道沿い、寂蒔上町の水除土堤周辺には多くの史跡があります。

土堤の横はかつて、地蔵堂のあった地籍です。その真向いに松尾芭蕉翁の「名月や児達ならぶ堂の縁」の句碑があります。松尾芭蕉が門人と共に、木曽路から猿ヶ番場峠を経由し、姨捨の長楽寺で月を眺め、句を詠み、善光寺を訪ねた折、江戸に向かう帰路、北国街道沿いの地蔵堂の縁側に腰かけ遊ぶ子供たちの姿を詠んだ句です。

また、奇香園蘭頂翁が詠んだ「花に酔い月に醒たるむしろ哉」の句碑も建立されています。

左に水除土堤、右に芭蕉塚

蘭頂翁は地元寂蒔の宮坂市郎左衛門で、天保14年に17歳で江戸に上り、俳諧や漢学を学び、嘉永元年22歳で郷里寂蒔に帰りました。そして、地蔵堂隣の自宅で家塾を開き、手習師匠として、幕末から明治時代まで漢学と俳諧の道を教えました。

多くの青年がその門人として世に出ました。

宮坂伯二翁は交友の一人で「月田毎我はひとりの影ぼうし」の句碑も、蘭頂翁の横に併設されています。

また、近隣住民の「講中」によって建立された「道祖神」「庚申塔」「馬頭観音像」などの碑も点在しており、それぞれ歴史を偲ぶことが出来ます。

その中でも珍しい祠と「青麻大神」と彫られた自然石の碑が上町集会所の横に建立されています。何時の頃設置されたのか分かりません。その青麻大神について地元には資料も乏しくインターネットなどを参考に調べてみると、次の3つの項目がありました。

その①青麻権現

青麻権現という神を祀ったといわれます。その青麻権現は八百万の神の一つです。

その本社は宮城県仙台市宮城野区にある神社で、天照大御神・月読神・天之御中主神を主祭神とし日の神・月の神・星の神を常祀る三光社の総社とし、常陸坊海尊を併祀します。常陸坊海尊は霊感により中風を封じ、また社家の穂積氏が水運に携わっていたことにより、海上安全の信仰もあるといわれています。

その②中風除けの神様

地域によって、古来より「中風除けの神様」として信仰されていました。寂蒔の青麻大神は中風除けのため、「青麻講」による講中によって設置されたと推測するところです。昔の人々は心のよりどころを信仰に求めた証でもあると思われます。

3度詣でれば、生涯、中風の難から逃れるとか、中風に悩む人が「オン、シシ、カダヤ、ソワカ」という呪文を3回唱えると霊感あらたかになるともいわれました。

近在では、旧戸倉町柏王地区の「柏王神社」境内にも祠と碑が設置されています。最近新しく建立されたものと思われ、中風除けの神としての説明が明示されています。

寂蒔上町の青麻大神

中風は、中気とも言いますが、現在では脳血管障害の後遺症である半身不随、手足のしびれや麻痺などをさす表現として用いられます。

その③青麻の語源

青麻とはイラクサ科の多年草で苧麻カラムシという古くからの植物です。越後上布や小千谷縮・奈良晒などの原料として珍重されました。

江戸時代の青麻の代表的産地は、山形・福島・新潟の3県で、中でも山形は我が国有数の産地でした。

青麻を栽培するには、肥沃な土地が充てられました。しかし、青麻の根は他の植物と違って強く張るため、後作はなかなか困難でした。

「青麻権現」は青麻の豊作を願って、多くは文化・文政年間（1804～1829）に建立されました。かつての青麻栽培の盛時を偲ばせるものでもあります。

寂蒔　宮坂博通

もっと知りたいふるさと 55

子安地蔵のロマン

何の変哲もない石造地蔵。

気にもかけなかった野仏の足元から湯釜と陣鐘が出土した。天保時代のことである。噂が噂を呼び、話が広がる。ついには「武田軍からの軍資金が埋まって…」というところまで広がっていった。しかし、いくら論議を重ねても由緒は不明のまま。約200年がたつが疑問は解けていない。

「城腰地籍上山田2697番地」付近に東を向き、素朴な雰囲気の中に地蔵が佇む。これは子安地蔵で、胸に抱く赤子、何か語りかけている口元の笑みが愛らしい。婦女子の健康を願う姿が感じとれる。

子安地蔵

湯釜も陣鐘も、室町時代末期の作と鑑定されている。陣鐘は直径19センチメートル程の黄銅製。湯釜は最大径25センチメートル、器高21センチメートル。そして3つの足を持つ年代物である。現在、上山田平野の篠原幸彦氏宅に大正時代の先祖が書いた諸（書）簡文と共に家宝として保管されている。

出土した場所は現在の位置とは違う。ここは村上一族の支族山田氏が統治しており、応仁時代にその居城があった。天文22年（1553）4月5日に武田軍によって陥落した。この付近は「城野腰」の「尾平（御平）」と呼ばれ、山田氏の家臣たちも周辺で農業を営みながら住んでいた。牧場もあったと伝えられている。陥落後は同じく支族である屋代氏が、居城の一重山城と共に統治していた。

5次にわたる川中島合戦や上杉、北条、徳川との戦いの中で戦火は絶えることがなく、屋代氏自ら城下に放火することもあったという。

屋代氏の時代には居城を「尾平」より200メートル程登った天照山普携寺（山田氏菩提寺。現在地より上）付近の山際に定め、弁天池の水を利用して生活基礎を固めた。一方、出城（荒砥城）との連携体制強化にも力を入れた。初代「屋代政国」が入城したのは永禄2年（1559）のことで、逃走した兵や農民の呼び戻しに尽力した。

湯釜と陣鐘

屋代氏が村上一族から山田氏と共に分家していったのは応仁時代。それまでは南側にある金比羅山と丸ゴロ山の中間の越戸（峠）を300メートル下り、女沢川を渡った釜屋に館を建て、生活を続けていた。しかし荘園や開田が拡大したため分家となった。

したがって、智識寺、山田領の越戸付近の古刹である山王山法華寺※注、そして隣接する湯の窪を、村上一族の共有資産としていたが、山田氏が去ってからは、屋代一族が管理監督をしようと考えた。天正6年（1578）政国が死去し、秀正の代にもこの考え方は引き継がれていく。

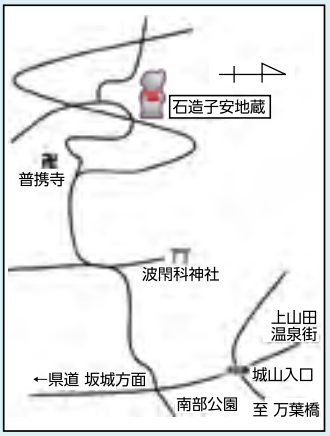
天正10年（1582）8月、上杉軍に属していた秀正は離脱を決意。その前に法華寺の一重山城下（屋代神明町）への移遷を実行した。国分尼寺からの仏像薬師観音菩薩のみの移遷で「寺のすべては普携寺に預けよ」との父政国の命に従ったものである。法華寺は後年、未曾有の豪雨と鉄砲水で流失して跡がない。今は法華寺沢の名のみが残っている。

薬師観音菩薩が去ったあと、陣内に残された湯釜と陣鐘は共に仏具の一種ではないか。陣鐘の音はブッダの死の直前、動物達の悲しむ声だという。寺と村上・屋代の名を残すため、戦火の犠牲者を弔うため、子安地蔵にこれらを託したとするのは考えすぎなのだろうか。

※注
建久8年（1197）源頼朝が善光寺詣での帰路立ち寄り、一族郎党、寺関係者を激励したと言う由緒ある寺

参考文献
『上山田町史』『普携寺誌』
「一重山屋代城跡と屋代家文書」

上山田　若林甫汎



もっと知りたいふるさと 56

荒屋道祖神とサイカチ

五加線から千本柳区荒屋分区への道路の分岐点に道祖神があり、ここにサイカチの老木が立っている。幹は北に傾き上部は枯れ落ち、胴部も半分ほど裂けてなく、芯が出ている。残った側からも外皮が芯を包み込むように盛り上がり、さらにこぶ状に肥大化した箇所もある。幾本かの太い枝がでており、葉を繁らせて丸く樹幹をつくっている。

大きな豆のさやをつけ、秋に葉が落ちてからも、しばらく茶褐色の実をぶらさげている。また、幹からは枝の変わった鋭い刺（とげ）がでており、区民はこの木を「サイカチバラ」と呼んでいる。かつては真直ぐに伸びた大木であったが、明治の中頃に落雷に遭い、幹が折れ、裂かれたと語り継がれている。

今年も若葉を繁らせる「サイカチの木」

サイカチの木と秋葉社石塔

石塔の脇に立つ道祖神の石碑

サイカチは水辺を好む。この木も落雷には遭ったが、道祖神の横を流れる用水の傍らに立ち、神木として守られるなど好条件で生育してきた。

ところが、近年になり用水路がコンクリートの側溝となった。道路はアスファルトで固められ、その度に掘り返されて根が切られた。また、上に張られた電線に触れるからと枝が切られるなどさんざん痛めつけられて、幹も傾き樹勢も衰えが目立ってきた。神木としては珍しいこのサイカチを永く残したいものである。

さて、道祖神であるが、その呼び方は「ドウロクジン」と呼ぶことが多い。そして、千本柳の道祖神は「やわたみち」の標識を兼ねているものが多い。道祖神の祭日は、小正月の1月15日と2月8日の初午の馬引きをあげる地区がほとんどである。どんど焼きは道祖神のある所でも行われてきたが、今では小学校の庭などでも行われている。

また、荒屋の道祖神脇には秋葉社の石塔がある。千本柳には、他に黒彦神社・甲組作業所及び北組に建っている。いずれも3メートルもある石の上に権現造りの小さなお社が載っている。これは通称「龍頭様」といって、多分石の部分が胴体で、御神体のあるお社が頭部に当たるのだろうか。龍頭様の御神体は秋葉三尺坊大権現で俗にいうお天狗様、この神様が「火を鎮圧する」神様なのである。

秋葉講は春と秋の2回、日待といって社殿に紫の幕が張り巡らされ、幟が建てられたという。その夜は講中一同が当番の家に集まり、手料理で酒食を共にし、一夜歓談し、親交を深めたという。今も日待の日には当番が幟を立てている。

参考文献
『戸倉町誌第一巻』（自然編・民族編）
『千本柳の来し方記』竹内正一著

戸倉公民館長　金井栄一

もっと知りたいふるさと 57

筒花火「八幡のとんとん」

八幡には、古くから「とんとん」と呼称されているお祭りがあります。

『武水別神社社伝』には、祈年祭（3月15日）・例大祭（9月15日）・大頭祭（新嘗祭、12月10日から14日）の「三大祭」があります。「とんとん」は例大祭前日の仲秋祭（9月14日）に、境内に準備された仕掛け花火や筒花火に点火され、その時筒花火が「とんとん」と威勢の良い音を立てて上がる様から表現されたようで、近郷近在で親しまれています。

この祭りは、善光寺平の豊穣と、千曲川の氾濫防止を祈るためとされています。

境内に仕掛けられた花火

「とんとん」と勢いよくあがる筒花火

昔、若い頃に、近所の古老から「『とんとん』は、花火師の競争のお祭りだ」と聞いた覚えがあります。この花火は、5町の世話人が輪番で作っていたようです。8月のお盆も過ぎると、その年の当番にあたる地区では花火作りの準備に取り掛かります。

まず民家の軒先を借り受け、ここを花火作りの仕事場として有志が集まり、材料の調達が始まります。荒縄を巻いた竹筒に、今年は炭粉や他の材料を何匁（なんもんめ）にするかと試行錯誤して、何回も試し上げをして当日の仲秋祭に備えます（当時は花火の材料の調合は門外不出とされていた）。

この花火の火種（火縄）の実権は、戸倉の羽尾区と八幡の姨捨区にあって、斎の森神社を出立した行列が、上町区と辻区の境にある高橋地籍に差し掛かると、両地区の代表と世話人との間で長い問答が行われます。問答の末に5町の世話人は、両区より火種（火縄）を譲り受けます。祭りの行列は進み、境内に高張提灯・お神楽・曳屋台などの行列一行の練り込みが終了すると、花火に点火されます。

大勢の見物客でにぎわう境内

天候や行列の進み具合にもよりますが夜9時半頃、見物客の目前で橋と境内の中の鳥居の間に丸太で組んだ仕掛け花火や筒花火が「とんとん」と打ち上げられます。花火の終了が近づくと祭事も終盤です。

その光景は、それは雄大かつにぎやかで見応えがあり、見物客からの歓声と拍手がやまない見事なものです。きっと昔も今と同じ光景だったと推測できます。

また、文献にはありませんが、人伝えでは、この祭りは平安時代からの放生会（ほうじょうえ）に基づいたものかとも考えられます。

「とんとん」の手作り花火も、明治・大正・昭和の1桁の時代までで、民間人が火薬を扱うことを禁止する法律ができると、この手作り花火の風習も無くなりました。今は時代の変遷とともに、花火作りは専門業者に委ねるようになりました。

八幡　町田吉功

もっと知りたいふるさと 58

治田神社

昔、大和朝廷は、政治の役職を臣、神社関係の役職を連として全国を統一していました。第21代雄略天皇（伊勢神宮に外宮を祀った天皇）8年（463）、近江の国の小豪族熊田氏が、治水、開墾、稲作技術に優れた功績が有ったとして、「治田の連」の称号を与えられ当地に赴任、治水と食糧事情向上をはかりました。他には第26代継体天皇の御世（530頃）との説があります。継体天皇が近江の国の出身で他の皇位継承者を倒して皇位を奪い、同国出身の熊田氏が取り立てられたという説です。

治田の語源は、荒地を開墾してできた田を墾田と呼び、稲作ができ、管理される田を治田ということからきています。そして、熊田氏が治田山中腹に先祖の、第9代開化天皇の第二皇子「彦坐命」を祭神にして祀ったのが治田神社の始まりといわれています。神社の社紋は当初14枚の菊の紋でしたが、武田軍の信濃侵略が始まり菊の葉を4枚付けて菱形にし、紋に傷をつけたとして花弁を12枚に減らしたのが現在の紋です（彦坐命は第10代崇神天皇の弟です）。

社　紋

主神の名は、彦（山彦の彦で返る）、坐（人が2人土の上）、命（生命）と読めるので、子宝を意味し、縁結び子孫繁栄を祈ったとも考えられます。延喜5年（905）醍醐天皇の勅により政治と祭事の仕方を統一するよう「式」の編纂が始まりました。これが『延喜式』です。延長5年（927）に完成した式の中に「延喜式神名帳」があり、勅に基き祭事を行っている全国2000社程の神社名が列記されていますが、治田神社はその1社です。

治田神社は桑原に上の宮、稲荷山に下の宮があります。主神は彦坐命で同じですが、武田の影響を受けて上の宮には諏訪大社の建御名方命と妃の八坂刀売命を奉じ、下の宮には倉稲大神（宇迦之御魂命）も奉じお諏訪さんの兄弟である事代主命（恵比寿様と同一視される）をお祀りしています。慶長3年（1598）徳川家により上杉家が会津に移封された際、当時の神職宮本家も同行。慶長13年後任の児玉家が着任し、以後400年間神社を守ってきました。

治田神社　奥に本殿

明治14年（1881）、上の宮と下の宮が郷社に指定され、明治33年（1900）、下の宮が県社に昇格、延喜式内社として平成2年（1990）、神社本庁より献幣使参向神社の指定を受け、毎年秋の例大祭には随員を伴い、当地の平穏無事・五穀豊穣を祈願していただいております。

下の宮の現本殿は寛政2年（1790）、拝殿は大正6年（1917）の築造です。近隣では珍しく真東に向いて建てられており、元宮が真後ろの設計です。春秋の2回、お彼岸のお中日には太陽が鳥居の中心に昇り、前の池（治田池）に映った太陽の光が本殿の大鏡を照らします。生命の源、太陽の恵みを充分取り入れた神様パワーを感じる神社です。

日の出の写真は稲荷山公民館と桑原の「竹林の湯」に展示されておりますのでご覧ください。

治田神社下の宮氏子総代長
髙村　征弘

神々しいお彼岸の日の出

公民館報
ちくま
No. 58
2017.10.1
長野県千曲市

三の鳥居前から さあ出発!!

7月22日(土)に、上山田公民館主催の「飯山市小菅山・北竜湖ハイキング」に40名が参加しました。これから奥社を目指す「修験者たち」の雄姿です。

特集 楽しかった夏山ハイキング

《主な掲載記事》
特集　夏山ハイキング…… 2～4
サークル紹介・夏休みの思い出‥ 5
リレーエッセイ・わがまちの自慢 …… 6
市民講座　水澤心吾氏の講演より
戸倉・上山田文化祭のお知らせ‥ 7
もっと知りたいふるさと…… 8

もっと知りたいふるさと 59

里人の心のよりどころ 倉科神社

倉科神社は区のほぼ中央、倉科コミュニティセンターの道を挟んだ向かいにある（敷地約4000㎡）。

明治41年、時の政府が一村一社制を施行し、村内各地に鎮座していた石井神社・倉科一宮神社・皇大神社・諏訪社・蚕影社・冨士浅間社・戸隠社の七社（旧七社）が石井神社に合社し「倉科神社」となった。現在、当時各神社から持ち寄った社号額が本殿に掲げられている。旧七社の草創は古く、倉科一宮神社は大宝年間（701～704年）に石杭の地へ、旧諏訪社は承和元年（834）に竹尾の地へ創建されたと伝えられている。

また、石井神社・皇大神社・蚕影社については元禄10年（1697）の「松代藩書」に記録されている。戸隠社・冨士浅間社は、江戸時代後期には既に存在していたと言われる。本殿中央にある御神鏡は江戸中期に作られたとのことで、250年は経過している。こうして倉科神社は合社前後数百年以上、倉科村民の「無病息災」「五穀豊穣」をお守りしている由緒ある神社といわれる。

御神鏡

春秋行われる獅子舞の奉納

合社当初から今も年間12の祭典が行われる。昔は、殊に春秋の祭りは村をあげての重要な行事で、春祭りにはその年の豊作と村人の息災を祈念し、秋祭りには豊年と安寧無事を祝い、余興では、草相撲・村芝居・演歌・神楽など賑やかに行われていた。しかし、時代の推移とともに祭りの盛り上がりがなくなり、参拝者も少なくなってきていた。

そこで、なんとか昔の祭りの賑わいを復活させようとの声が上がり、5年ほど前から春秋の祭りでは神楽保存会による神楽のお練りや獅子舞などが奉納されている。秋祭りには春よりも盛大な獅子舞の他、本殿前で育成会の子どもたちがおもちゃ販売や綿あめのサービスをする露店、盆踊り保存会の伝統ある「たにし踊り」などがあり、大変賑わうようになった。

更に食生活改善委員会の皆さんが昼食のおにぎりやみそ汁を作ってくれるので参拝者も増えて楽しい会が一段と盛り上がってきている。

御神木の欅

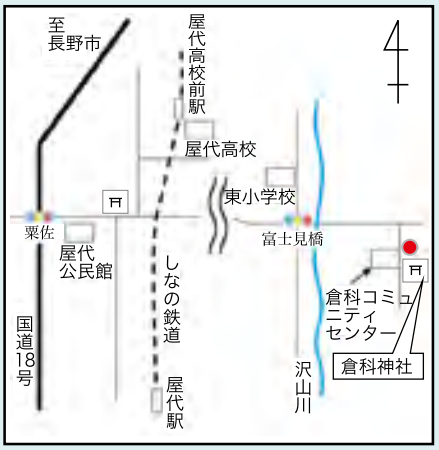
神社敷地西北にある、樹齢270年余の欅は、市の保存木に指定されたのを機に「御神木」として祀られ、神社とともに倉科の里の人々の幸せを守っている。

神社の敷地や社殿は、各常会から選出された神社役員や育成会役員等によって定期的に掃き清められ、子どもたちの遊び場や散策の休憩地、集合場所などになっている。たまたま標高が387㍍で、「郵便番号と同じだね」と、いっそう親しまれている。

お盆には公民館役員により広場の真ん中に櫓が組まれ、盆踊りの輪が広がる。スイカ割り大会・ビンゴゲームなども行われ、若者有志による大型露店「わくわくランド」が店開きし、金魚すくい・水玉ヨーヨー・焼き鳥・かき氷・ビヤガーデンなどで大変賑わう。まさに人々の交流の場・歓談の場となる。

こうして倉科神社は、里の人々の心のふるさと、かけがえのない心のよりどころとなっている。

「倉科の里ガイドブック」編纂委員会　町田直幸



もっと知りたいふるさと 60

打沢の馬鳴尊（めみょうそん）

打澤神社の境内にある馬鳴尊の石碑は、高さ143センチメートル・幅105センチメートル・厚さ30センチメートルの玢岩（ひんがん）に、行書で「馬鳴尊」と刻字してある。

建立は天保6年8月とされ、その背景には寛政13年に塩尻村を中心に上田村・打沢村など舟山地区の蚕種業者により結成された「神明講」があった。打沢村の竹内屋宗十郎が寄進した記録があり、養蚕家の崇敬を集めたと考えられる。

馬鳴とは「広辞苑」によれば2世紀頃のインドの仏教詩人で、バラモン教から仏教に帰依し、カニシカ王の保護を受けて仏教興隆に尽力し「仏所行讃（仏陀釋尊の生涯を記した物語）」「大壮厳論経」「大乗起信論」「犍稚梵讃（けんちぼんさん）」などを著したとの記載がある。

他には『仏陀の生涯「仏所行讃」を読む』（平川彰著、平成10年3月発行）に詳しい。名はサンスクリット語でアシュバゴーシャといい、元々は上流階級バラモンの学者であった。仏教を非難し富那奢と論争したが論破される。死をもって詫びようとしたが、諭されて弟子入りしたという。前述の著書は、430年頃曇無讖（どんむせん）により中国へもたらされ、そのとき馬鳴と訳されている。

更に『蠶神考（さんしんこう）』（村島渚著、昭和8年3月発行）の第5章「仏教上の蠶神」に、馬鳴と彼の誓いの記述がある。要約すると「大神力無比験法稔誦儀軌に釋迦如来菩提樹の下に座して申します。われ仏法を荘厳し、貧しい人、困っている人、身分の賤しい人、又裸の人々に衣服を与えんが為、限りなく菩薩の業に励み常に家や国土に大光明を放ち美しい絹地や綿地の織物の衣服を成就愛用せしめん」となる。また、中国唐代の「宝林伝」（9世紀頃）にも「昔天竺に一馬国あり。人皆毛を生じて声馬の如し、馬鳴菩薩かつて蚕虫を作って口より糸を出し人をして衣を作らしむ」とある。馬鳴は、仏教の養蚕守護者として定着し、中国から日本へ伝えられたものであろう。

日本の養蚕は、秦の始皇帝12世の孫功満王が京都の嵯峨野周辺に移住し、養蚕織物を広めたことが始まりとされる。王の一族は仁徳天皇より波陀（はだ）の姓を賜り、後に秦氏と称する。京都市右京区太秦（うずまさ）の広隆寺には馬鳴堂と像があり、同地を中心に養蚕が盛んであったことがうかがえる。

筆者が初めて馬鳴菩薩像に接したのは須坂市だった。当時の須坂市立博物館長湧井氏と製糸の町須坂について対談し、蚕神の菩薩像のことを尋ねると、縦76センチメートル・横26センチメートルの蠶祖神の掛軸を倉庫より出していただき、拝観することができた。常陸国蚕影山別当桑林寺にあった彩色の掛軸で、六臂の腕に桑の枝・糸巻繭玉・秤・蚕虫などを持ち、馬に跨り金冠をつけ、赤い絹布をまとい紫雲に乗る姿は、養蚕農家の信仰の対象にふさわしい。

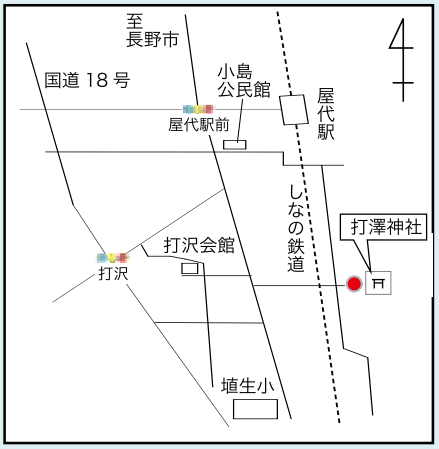
菩薩像は、県内では飯田市の立石寺・雲彩寺などにある。近隣では山梨県の甲斐善光寺に蚕児菩薩（別名摩利支天像）が、さらに群馬県の正楽寺・信照寺・成孝院・長寿院にも像がある。筆者は正楽寺と長寿院で菩薩像を拝観したが、立派な像であった。

打沢　牧　忠男

馬鳴尊の石碑

蠶祖神の掛軸
（須坂市立博物館所蔵）

群馬県長寿院の馬鳴菩薩像



公民館報
ちくま
No. 60
2018.2.1
長野県千曲市

祝！成人おめでとう

1月7日(日)更級文化会館あんずホールにおいて、平成30年千曲市成人式が開催され、対象者682名中533名の皆さんが出席しました。
写真は、ホール入り口での、新成人の晴れ姿です。
『式典』では、新成人代表2名が誓いの言葉を述べ、続く『成人の集い』では小中学校の思い出のビデオ上映やビンゴ大会があり、大いに盛り上がりました。

《主な掲載記事》
成人式実行委員長あいさつ・誓いの言葉 …… 2
新成人の皆さんに贈る言葉 …… 3
成人式フォトギャラリー …… 4～5
第22回更埴地区短詩型文学祭入賞作品　他 …… 6～7
もっと知りたいふるさと …… 8